

# プラトン『ポリテイア』I.334 D-E の ポレマルコス論駁

納富信留

プラトン『ポリテイア』第 I 巻で、ソクラテスの第 2 の対話相手となるポレマルコスは、シモニデスの権威を持ち出して「友を益し、敵を害する」という正義の定義を提示する。その論駁は 3 段階からなるが\*1、第 2 議論の最終部 334 D-E は文献学上・解釈上で問題があるにもかかわらず、これまできちんと検討されてこなかった。本論文はその読みと内容を再検討する。

まず、Slings の新 OCT 版 (2003) テキストを示す\*2。

Resp. I.334 D-E

334d10 (1) Πολλοῖς ἄρα, ὦ Πολέμαρχε, συμβήσεται, (2) ὅσοι διημαρτή-  
e1 κασιν τῶν ἀνθρώπων, (3) δίκαιον εἶναι τοὺς μὲν φίλους βλάπτειν,  
πονηροὶ γὰρ αὐτοῖς εἰσιν, (4) τοὺς δ' ἐχθροὺς ὠφελεῖν, ἀγαθοὶ  
γάρ· (5) καὶ οὕτως ἐροῦμεν αὐτὸ τούναντίον ἢ τὸν Σιμωνίδην  
ἐφάμεν λέγειν.

d10 πολλοὺς F  
Stephanus

e2 αὐτοῖς A prF x; Bekker et alii: αὐτοί D Fpc; Aldo,

## 写本上の読みの問題

問題となる E2 の読みは、αὐτοῖς (複数与格形) と αὐτοί (複数主格形) で分かれている。主要な ADF の 3 写本を画像で確認したところ、Slings の異読情報にある通り、A 写本が与格形、D 写本が主格形であり、F 写本は一旦与格形で書かれた後で主格形に訂正されている\*3。語末のシグマが上書きで雑に消され、イオタ上に鋭アクセントが加えられてい

\*1 ケファロスを受け継ぐ導入部 (331 D4-332 C4) で、ポレマルコスは詩人シモニデスの「各人に借りているものを返すこと」という立場に依拠して正義の定義を提示する。それに対して第 1 議論 (332 C5-334 B7)、第 2 議論 (334 B8-335 B1)、第 3 議論 (335 B2-E7) の吟味がなされ、結論 (335 E8-336 A10) が与えられる。

\*2 Slings は Burnet から D の行数に 2 行ほどズレがある。基準となる Stephanus 版で 334 D は τοὺς δὲ ἀγαθοῦς から始まるが、Slings 版では Ἀλλὰ μὲν からとなっている。これは単純なミスと思われるが、混乱を避けるため、以下ズレたままの行数で参照する。

\*3 新 OCT の初版には写本情報に誤植があることが、S. R. Slings, *Critical Notes on Plato's Politeia*, ed. G. Boter and J. van Ophuijsen (Leiden: Brill, 2005), 203 で報告されている。直して記載する。

る。シグマ上に置かれていた曲アクセントはそのまま残っている。

Boter, 190–200 によれば F 写本族には 6 つの写本が属するが\*4、そのうち画像で確認できた x 写本では、F 上の訂正とは異なり、与格形が記されている。このことは、x が F の忠実な子写本ではないか、もしくは F 写本の訂正が x 作成の後でなされたかという可能性を示唆する\*5。訂正が誰の手によるものかは画像からは判然としないが、D 写本系統の読みを書き入れたものであろう\*6。

Aldo 版 (1513) と Stephanus 版 (1578) という 16 世紀の近代校訂版は、共に主格形で印刷している\*7。その影響下で、19 世紀初めの Ruhnken 版 (1818) までその読みが通用してきた。だが、19 世紀初めの Bekker の校合により主要写本で与格形が記されていると報告され、Bekker 版 (1817) 以後、現代の校訂版は全て与格形を採用している。

だが、現代の校訂版でも異読情報に不正確さや不十分さが残っていた。Bekker は「ΑΘΞΦ $\nu$ r」(彼の記号) の 7 写本が共通して与格形で、Stephanus 版など流布本のみが主格形をとると報告した\*8。また、Burnet の旧 OCT 版 (1902) では D 写本の主格形に対して AFM の 3 写本が与格形とされており\*9、F 写本の訂正には触れられていない。読みの強弱を判断する際に、これら不十分な写本情報が影響を与えた可能性がある。

まとめると、写本の読みは 2 つに分かれており、どちらも有力な典拠をもつ。だが、F 写本の訂正経緯やその継承を含めて不明な点も残る。Aldo 版以来の近代校訂版が主格形を採用していたのに対して、19 世紀以後は写本校合の結果が判然と示したと信じられた与格形を採用する流れに変わり、現在まで続いている。

\*4 Darmst. (Darmstadt 2773 Misc. Gr., 13–14 or 14–15 C?), x (Florentinus Laurentianus 85, 7, 15 C), Ricc. (Florentinus Riccardianus 66, 15 C?), v (Angelicus 101, 15 or 16 C), Ox. (Oxonienis Corpus Christi College 96, 15 C), Bodl. (Bodleianus Misc. Gr. 104 (Auct. F. 4.5), 16 C). なお、写本記号・情報も Boter による。諸写本の画像は瀧章次氏からご教示いただいた。感謝申し上げます。

\*5 この事実は、Boter, 104 の記述に反する：The corrections by all the later hands in F recur in x and Darmst. この点を Boter 氏本人に E メールで照会したところ、以下の個人的回答を得た：Because the sigma has not been completely erased or canceled F in fact has both readings,  $\alpha\upsilon\tau\omicron\iota\varsigma$  and  $\alpha\upsilon\tau\omicron\iota$ . This may explain why Flor. x has  $\alpha\upsilon\tau\omicron\iota\varsigma$ .

\*6 Boter, 101–104 は、F 写本の訂正を 5 名の手 (F<sup>2</sup> から F<sup>6</sup>) に分けて検討しており、F<sup>3</sup>, F<sup>4</sup>, F<sup>5</sup> の訂正が D 写本族の Par. 写本 (Parisinus 1810, 13 C?) の読み合致する傾向を指摘している。

\*7 Aldo 版の校訂では Par. 写本が参照されたと Boter は示唆しており、主格形の読みはそれに由来する可能性がある。ただし、A 写本族に属するが、D 写本を一時所有したベッサリオンが作成させた E、N 写本の検討も必要である。

\*8 Bekker, *Commentaria*, 4. そこに II (= D) 写本の情報は記されていない。

\*9 M 写本 (Caesenas D 28,4, 15 C?) についても画像で与格形であることを確認した。

## 解釈の問題

読みの選択は、文、及び議論の解釈と連動している。現代校訂版が採用する与格形をとる場合に、大きく2つの読み筋（A 解釈と B 解釈）が提案されている。*αὐτοῖς* の与格をどの用法で捉えるかで違いが生じ、根本的に異なる議論の筋となる。

それでは、ポレマルコス君、(2) 人間について\*10 誤ってしまっている (1) 多くの人々には次のような帰結が生じるだろう。(3) 即ち、友を害することが正義であり——〈A〉彼らにとってその人たちが劣悪であるので／〈B〉彼らは劣悪な人を持っているので——(4) 敵を益することが正義である——〈A〉（彼らにとってその人たちは）善い人であるので／〈B〉（その人たちは）善い人であるので。(5) そうすると、私たちはこれが、シモニデスが言っていると私たちが主張したのとは反対だと言うことになる。

他方で、A 解釈か B 解釈かが不明な翻訳もあり、例えば Cornford、Grube-Reeve、藤沢らは *αὐτοῖς* の語を訳出していない\*11。

## A 解釈の検討

まず、与格形 *αὐτοῖς* を「彼らにとって」という判断主体を表す与格 *ipsorum iudicio* ととる Stallbaum の解釈は、当該文脈に整合的に見える\*12。

第2 議論は、正義の定義に登場する「友／敵」について「実際にそうである／そう思われる」の区別を示して、そこから困難を導く。ポレマルコスは「各人にそう思われる人」という選択肢を採るため (334 C4-5)、この議論を通じて「誰に」に当たる与格形が決定的な重要性をもつ。そこで与格形は4 回用いられ (C1, C7, C10, C12: 後で検討する)、続いて E2 で *αὐτοῖς* が登場することから、以前と同様に「彼らにとって（彼らの判断で）そ

\*10 τῶν ἀνθρώπων の取り方で議論があり、「人間のうち」として ὅσοι にかかる部分属格か (Jowett & Campbell)、διημαρτήκασιν の目的語ととるか (Adam) に分かれる。後者を採る。

\*11 F. M. Cornford, *The Republic of Plato* (Oxford: Oxford University Press, 1941): when they really are rogues / when they really are honest men; G. M. A. Grube, *Plato, Republic*, revised by C. D. C. Reeve (Indianapolis: Hackett, 1992): who are bad / who are good; 藤沢令夫訳、プラトン『国家』(岩波書店「プラトン全集 11」1976; 岩波文庫(上)、1979): その相手は実際には悪い人間なのだからね／その相手は実際には善い人間なのだからね。

\*12 Stallbaum, 30: Multis igitur accidet, qui iudicio suo de hominibus falsi fuerint, ut iustum esse putent amicos laedere; improbi enim sunt ipsorum iudicio; inimicos vero iuvare; boni enim sunt. ... Dativus significat **ipsorum iudicio** (cf. *Phaedo* 101 D Dativum σοι interpreteris tuo iudicio, ut Reip. I. p. 334 E).

うである」という意味に取るのは、一見自然である。Stallbaum がこの説明を与えて以来、D. J. Allan、Waterfield らの翻訳でこの解釈が取られている\*13。その場合、与格形が含まれる挿入は、次のような理由説明となる。

- (3) (本当の) 友を害する：彼ら (判断を誤る者) にとって悪い (と思われる) 人なので  
 (4) (本当の) 敵を益する：(彼らにとって) 善い (と思われる) 人なので

この議論からは、判断を誤った人々が正義だと思っ・て行っている行為は、客観的にはシモニデス定義の正義とは反対になる。

他方で、この読み方には欠点もある。まず、(3) 「～にとって、ある」という与格形を他方の挿入文 (4) にも補って理解する必要がある。無理ではないにしても、やや不自然に感じられる。なお、与格形を「ある εἰςίν」にかける組み合わせは、文脈上不可能ではないが、直前に明確な用例はない (後の検討を参照)。

また、この解釈では、(1) 「判断を誤っている多くの人々」の場合、本人の主観的な理解と客観的な事態との間に矛盾が帰結することになるが、それは判断ミスに過ぎないとも考えられ、(5) シモニデスの定義そのものが退けられるとは限らない。

## B 解釈の検討

Adam は Stallbaum の解釈を批判して、与格形を所有 possessive の意味で “for they have bad friends” と読むことを提案する。その読み方は、Adam に先立って Schleiermacher や Jowett & Campbell も採用していたが\*14、その後も Shorey、Chambry、Vegetti、山本光雄ら多くの訳者によって採用されている\*15。

- (3) 友 (善いと思われる人) を害する：彼ら (誤った判断者) は、悪い人を (友に) 持つので  
 (4) 敵 (悪いと思われる人) を益する：その人は (本当は) 善い人なので

\*13 D. J. Allan, *Plato, Republic, Book I* (London: Methuen, 1940): for them, i.e. in their eyes; R. Waterfield, *Plato, Republic* (Oxford: Oxford University Press, 1993): whom they regard as bad / whom they regard as good.

\*14 F. Schleiermacher, *Platons Werke*, III-1 (Berlin: Realschulbuchhandlung, 1828), 85: denn sie haben schlechte / denn diese sind gut; B. Jowett & L. Campbell, *Plato's Republic*, III (Oxford: Oxford University Press, 1894): For they had bad ones.

\*15 P. Shorey, *Plato, Republic Books 1-5*, Loeb Classical Library (Cambridge MA: Harvard University Press, 1930): for they have got bad ones / for they are good; E. Chambry, *Platon, La République*, I (Paris: Budé, 1932): puisqu'ils ont pour amis des méchants / qui sont en effet d'honnêtes gens; M. Vegetti, *Platone, La Repubblica*, I (Napoli: Bibliopolis, 1998): perché ne hanno di spregevoli / perché sono buoni; 山本光雄、プラトン『国家』(河出書房、1965): というのは彼らは邪悪な友人を持っているから / というのは善い敵を持っているから。

## (5) シモニデス定義とは正反対になる

この解釈では、(1) 誤っている多くの人々にとって、シモニデス定義で本当の正義を行うことは、(5) シモニデス定義に矛盾する。ここから導かれるのは、ポレマルコスによる「思われる」という仕方での「友／敵」理解が、シモニデス定義に形式上の矛盾をもたらすという問題である。この場合は人々の判断ミスでは片付けられず、特定の場合であれ定義そのものに矛盾が生じるという批判となる。

この解釈には、3点で構文的な問題がある。

第1に、先立つ4つの与格形は「～にとって」という意味であったが、ここの *αὐτοῖς* だけ「～が持つ」という異なる構文と意味で読むのは、いかにも唐突である。所有の与格を用いなくても、同様の内容は十分に表現できたはずである。

第2に、(3)で定冠詞なしの形容詞 *πονηροί* が主語となり「劣悪な人・悪い人」と実詞で訳すことになり、この点にも無理がある。

第3に、(4)の挿入文には与格形がなく、そこは通常「(彼らは) 善い人である」と解される\*16。つまり、並行する(3)と(4)の挿入文で動詞 *εἶσιν* の意味、及び構文と主語が異なることになる。この点も非常に不自然である。

## 与格形の検討

ここで、第2議論で用いられる他の4箇所の与格形を検討しよう。

ソクラテスによる最初の質問に与格形(I)「各々に *ἐκάστω*」(334c1)が登場し「思われる *δοκοῦντας*」にかかる。ポレマルコスは一旦「人が有益と考える *ἀν τις ἡγήται*」(c4)という別の動詞で受けるが、ソクラテスは先の構文で(II)「彼らには *αὐτοῖς* 有益であると思われる *δοκεῖν*」(c7)と語る。ここまでは問題ない。

その判断が誤ることがあると合意された後、(III)「彼らにとっては *τούτοις* 善い人が敵であり、悪い人が友である」(c10)という逆説が導かれる。そこでは前と同様に分詞「思われる *δοκοῦντες*」が理解されて主動詞「ある *εἶσιν*」が省略されていると解するのが自然であるが(III-1)、与格形が文頭に出ていることから、「思われる *δοκοῦσιν*」という主動詞(省略)にかかるようにも見える(III-2)。それぞれの場合を検討しよう。

III-1 彼らに善い(と思われる)人が敵であり、悪い(と思われる)人が友である

III-2 彼らにとっては、善い人が、敵と思われ、悪い人が、友と思われる\*17

\*16 ただし、前注の山本訳のように、そこにも与格を読み込む可能性もあり、その場合この問題点は生じない。

\*17 G. P. Rose, *Plato's Republic Book I*<sup>2</sup> (Bryn Mawr, PA: Bryn Mawr Commentaries, 1983), 15 は、*ἐχθροί, φίλοι* に

意味上はどちらも可能であるが、「友／敵と思われる」という表現が前後の文脈で使われておらず、「彼らに思われる」という限定があくまで「善い／悪い」にかかることから、III-1 がより適切であろう。

続く質問でソクラテスは(IV)「彼らにとって *τούτοις* 劣悪な人を益し、善い人を害することが正しい」(CI2) と語る。ここでも与格形は III-1 のように「思われる」の分詞を伴い「劣悪な人」にかかるともとれるが(IV-1)、III-2 のように文章全体にかかり「正しい」を限定するようにも読める(IV-2)。

IV-1 彼らにとって劣悪な（と思われる）人を益し、善い（と思われる）人を害するのが、正しい

IV-2 劣悪な人を益し、善い人を害するのが、彼らにとっては正しい

IV-1 は、正義を行う場合に生じる主観的な矛盾を示す。IV-2 は判断を誤った人が行う正義を客観的に記述する文である。独立にはどちらも理解可能であるが、III-1 が適当とする場合、連動して IV-1 を採ることが自然であろう。ただし、III と IV で構文が変わっている可能性も排除はできない。

これら 4 つの与格形をすべてソクラテスが用いている点が注目される。構文的な両義性も含めて、与格が持つ問題性を示す意図があると考えられるからである。

ここでもう一つ、本論文の検討箇所の冒頭にある与格形 *πολλοῖς ... ὄσοι* (DIO) にも注目しよう。それは *συμβήσεται* という動詞にかかるが、構文的には IV-2 (III-2 も) に近いからである。

与格の扱いは『ポリテΙΑ』で、また他の対話篇で哲学的な問題を生む。第 I 巻では、後にクレイトフォンが「思われる／実際に」の区別を持ち出そうとしてトラシユマコスに退けられる (340A-C)。言うまでもなく、これは第 5 巻以降のイデア論にとって決定的となる区別である。また、『テアイテトス』で検討されるプロタゴラス説は「～に、そう思われる・現れる」を「～にとって、そうである」と等置しており\*18、相対主義をめぐる哲学議論に直結する。「思われる、ある」に関わる与格、つまり「誰にとって」という問題が、ポレマルコスの第 2 議論で予示されていると考えられる。

*εἶσι* を補う読み方を提案している。その場合は「彼らにとって、敵／友である」になる。

\*18 *The. I* 52 A-C, I 73 A 等参照。

## 議論構成

B 解釈をとる Adam は、第 2 議論前半 (以下の i-vii) は「正義とは、不正をしない人を害する」という不道徳を帰結し、後半 (viii-x) は「正義とは、友を害して敵を益する」というシモニデス定義の矛盾を帰結するという「ディレンマ」として理解する。だが、その議論理解は正確か。2 部に分けて検討しよう。

### 前半部

- i 友について、「有益だと思われるだけの人／実際に有益な人」の選択肢を導入 (334 CI-3)  
ポレマルコスは「有益だと思われる人」を選ぶ (C4-5)
- ii 人間は判断を誤って、思われと実際を取り違える (C6-9)
- iii [ii の結果] 彼らにとって善い (と思われる) 人 (=友) は (本当は) 敵であり、悪い (と思われる) 人 (=敵) は (本当は) 友である (CI0-II : III-I を採る)
- iv [大前提 : iii を正義の定義に代入] 正義とは、彼らにとって悪い (と思われる) 人 (=敵) を益し、善い (と思われる) 人 (=友) を害する事になる (CI2-I4 : IV-I を採る)
- v [小前提\*19] だが、善い人は、正しく、不正をなさない (DI-2)
- vi [iv と v からの結論] 正義とは、不正をしない人を害する事になる (D3-4)
- vii [vi の結論を否定] 言論が劣悪だった (D5-6)

この議論は三段論法の形式をとるが、大前提 iv に含まれる「彼らにとって」という与格形が小前提 v では欠落して推論されるため、実際には誤謬推論となっている。ポレマルコスが直感的に「言論が劣悪だ」と述べたのは (D5-6)、Adam の解釈のように結論が不道徳だからではなく、限定句欠落の誤謬を感知しての発言であった。

後半部は A 解釈と B 解釈で異なる議論に解される。まず、B 解釈を見よう。

### 後半部：B 解釈

- viii [vii を受けて vi の反対] (本当の) 正義とは、不正な人を害し、正しい人を益することである (334 D7-9)

\*19 J. D. Denniston, *The Greek Particles*, 2nd edition (Oxford: Clarendon Press, 1934), 346 はこの箇所を参照し、ἀλλὰ μὲν が小前提を導く用例としている。

- ix [i と ii を viii に代入] 判断を誤った人々にとっては、(本当の) 正義とは、友 (善いと思われるが、実際には悪い人) を害し、敵 (悪いと思われるが、実際には善い人) を益する事になる (D10-E3)
- x ix は、シモニデスの定義と反対である (E3-5)

この解釈では、前半の大前提 (iv) 「悪い人を益する／善い人を害する」と後半の結論 ix 「友を害する／敵を益する」が、同じ事柄を別の言い方で示している対になる。

### 後半部：A 解釈

- viii [vii を受けて vi の反対] 正義とは、不正な人を害し、正しい人を益することである (334 D7-9)
- ix\* [i と ii を viii に代入] 判断を誤った人々にとっての正義とは、(客観的な) 友 (彼らに劣悪だと思われる人) を害し、(客観的な) 敵 (彼らに善いと思われる人) を益する事になる (D10-E3)
- x\* ix\* は、シモニデスの定義と反対である (E3-5)

### 主格形の採用

議論構成を比べると、形式上の矛盾を示すことでポレマルコスが理解するシモニデス定義の問題性を指摘する B 解釈の線が、より適切に思われる。だが、E2 の *αὐτοῖς* だけを所有の与格と解するのはあまりに不自然である。他方で、その与格を「関係、心性、観点」といった別の意味にとることも、複数の与格形が意図的に用いられるこの文脈の解釈としては安易に過ぎる\*20。

そこで、D 写本と F 写本訂正を典拠にして、主格形 *αὐτοί* を読む選択肢が有力となる。その際、*αὐτοί* は判断や所有の主体「(判断を誤った) 多くの人々」ではなく、友や敵に当たる人をさす。

文法書の説明では、definite adjective / pronoun である *αὐτός* には (1) 強調で「自体・自身」、(2) 単独で指示代名詞「彼を、彼女を、それを、等」(斜格のみ)、(3) 定冠詞に先行されて「同じ」、の 3 つの意味があるが、主格が単独で用いられる (1) の強調では、対応する

\*20 例えば、Rose, 15 は、dative of relation で “in their cases” と訳し *τούτους* (C10) と同じに読む提案をしている。もし関係の与格と解すると「善い／悪い」の相対性を意味し、議論に不要の混乱をもたらすことになる。心性的与格 ethical dative もここでは意味をなさず、紛らわしいだけである。



代名詞がしばしば省略されるという\*21。E2 を αὐτοί という主格で読む場合はこれに当たる。実際、αὐτοί が 3 人称複数の主語を受けて単独で用いられ、「彼ら自身が」という強意を帯びる用例は、プラトン対話篇で珍しくない。一例として次の箇所を挙げる\*22。

*Soph.* 233 B: Καθ' ὄντινα τρόπον ποτὲ δυνατοὶ τοῖς νέοις δόξαν παρασκευάζειν ὡς εἰςί πάντα πάντων αὐτοὶ σοφώτατοι.

以上から、主格形で読むことは文法的に問題なく、写本上も一定の典拠があることから、334 E2 を αὐτοί で読むことを提案する。強調を表す主格形の読みは、文脈上も相応しい。ポレマルコスの前提から「友」とされる人が、実際には「彼ら自身は劣悪な人であるので」と強調して理由づけられる必要があるからである。その場合、翻訳は以下の通りとなる\*23。

それでは、ポレマルコス君、(2) 人間について誤ってしまっている (1) 多くの人々には次のような帰結が生じるだろう。(3) 即ち、友を害することが正義であり—彼ら自身は劣悪な人であるので πονηροὶ γὰρ αὐτοὶ εἰσιν—(4) 敵を益することが正義である—(彼らは) 善い人であるので。(5) そして、私たちはこれが、シモニデスが言っていると私たちが主張したのとは反対だと言うことになる。

(東京大学)

## 主要参考文献

- Adam, J., *The Republic of Plato*, vol. I; revised by D. A. Rees (Cambridge: Cambridge University Press, 1902/21963).
- Bekker, I., *Platonis Dialogi graece et latine*, III-1 (Berlin: G. Reiner, 1817).
- Bekker, I., *In Platonem a se Editum, Commentaria Critica*, II (Berlin: G. Reiner, 1823).
- Boter, G., *The Textual Tradition of Plato's Republic* (Leiden: Brill, 1989).
- Burnet, J., *Platonis Opera* IV, Oxford Classical Texts (Oxford: Oxford University Press, 1902).
- Slings, S. R., *Platonis Rempublicam*, Oxford Classical Texts (Oxford: Oxford University Press, 2003).

\*21 H. W. Smyth, *Greek Grammar*, revised by G. M. Messing (Cambridge MA: Harvard University Press, 1956), §§328, 1204, 1206a; W. W. Goodwin, *Greek Grammar*, revised by C. B. Gulick (New York: Ginn & Company, 1930), §989.

\*22 他に、関係詞節の内の主語として使われる例: *Ap.* 22 B, *Phd.* 91 A, *Prot.* 342 D.

\*23 草稿について栗原裕次、荻原理氏をはじめ科研研究会で有益な議論をしていただいた。本誌査読者と合わせて感謝申し上げたい。

62 納富信留 プラトン『ポリテイア』I.334 D-E のポレマルコス論駁

Stallbaum, G., *Platonis Dialogos Selectos*, III-I, *Politiae* Libr. I-V (Gothae et Erfordiae, sumtibus Guil. Hennings, 1829).